

平成 20 年度 JAXA 宇宙連詩への取り組みの報告
実施概要

団体名	松庵小地域 子育てシンポジウム 実行委員会	委員長名	丹野由美
学校所在地住所	〒167-0054 東京都杉並区松庵2-23-24 http://www.suginami-school.ed.jp/shouanshou/		
参加者	松庵小学校区の地域の方々（松庵小地域子育てネットワーク）		
参加目的	宇宙連詩に地域で取り組むことによって、様々な不安を抱えながら子育てをする世代と他の世代をつなぎたい。そして、少しでもその不安を解消し地域の子育て力を高めたい。		
目標	<p>目標 1：宇宙という視点から身の回りのモノゴトや繋がりを見ること、考えるきっかけを、参加者に与える。（JAXA ヘレクチャへの協力を要請）</p> <p>目標 2：宇宙連詩に向けての詩の書き方を学ぶ機会を、参加者に提供する。（JAXA ヘレクチャへの協力を要請）</p> <p>目標 3：松庵小地域で、「星の回覧板」を回し、宇宙連詩の編纂を促進する。「星の回覧板」を冊子化し、完成発表会を行うことで、自分の参加した回覧板以外の人々とも詩を共有し、つながりを意識できるようにする。</p>		
具体的な取り組み内容			
実施段階・時期	子育てシンポジウム全体に関する取組内容		
準備段階 7月～	JAXA 職員と地域関係者（松庵小地域子育てネットワーク）との意見交換会を開催し、参加者の決定、宇宙連詩に地域で取り組むための計画の作成と準備を、松庵児童館を事務局とする松庵小地域子育てネットワークのメンバーが、JAXA の協力を得て（職員、詩人）進めた。		
導入段階 11月11日	目標 1、目標 2 への取り組み JAXA 協力（JAXA 職員の講師としての派遣）のもと、覚和歌子さんによる公開授業及び山中氏による宇宙レクチャを実施。（200分）約 190 名の参加。		
導入段階 12月13日	<p>目標 1、2 への取り組み</p> <p>JAXA 協力のもと、シンポジウムを実施。（120分）約 250 名の参加。</p> <p>導入：宇宙連詩によって言葉がつながり、それによって人がつながるという自覚を参加者から引き出すための、パワーポイントを使ったショートストーリーを実施。（地域参加者作成）</p> <p>基調講演：谷川俊太郎さんより「言葉でつながることについて」</p>		

	<p>シンポジウム：子育てシンポジウム実行委員（源関淳子さん）による「星の回覧板」の広がりに関する報告、学校・学級宇宙連詩（4年生担任）の報告、地域参加者（鎌田あつ子さん）による「地域のつながり」に関する報告、JAXA 山中氏による「星の回覧板」を宇宙へつなげる活動の報告。</p> <p>谷川俊太郎さんへの質疑応答、感想の集約</p>
<p>実施段階 3月15日</p>	<p>目標3への取り組み</p> <p>「星の回覧板」完成発表会を実施。（120分）約350名の参加。</p> <p>導入：「星の回覧板」の広がりに関する報告。</p> <p>「学校・学級宇宙連詩」の発表（音楽をつけて）</p> <p>地域でつながった31丁目の「星の回覧板」の朗読（音楽をつけて）</p> <p>谷川俊太郎さん、覚和歌子さんによる「星の回覧板」、宇宙連詩をテーマとした対談。お二人への質疑応答、感想の集約</p> <p>「星の回覧板」をきぼうへ（JAXA 山中氏、杉並科学館館長渡邊氏によるお話）</p>
実施段階・時期	「星の回覧板」に関する取組内容
<p>準備段階 9月</p>	<p>「星の回覧板」のデザインを、絵本作家スギヤマカナヨさん、デザイナーせきねめぐみさんに依頼。（松庵小PTA）</p>
<p>実施段階 11月～2月</p>	<p>11月の公開授業にてチームづくり（8丁目まで）</p> <p>松庵小学校の同好会や、まこと幼稚園、松庵児童館、松庵保育園、ボランティア仲間、犬の散歩仲間、地域のお店（松寿司、やぶそば、吉祥寺絵本屋「おばあちゃんの玉手箱」）、吉祥寺産婦人科「水口病院」などへ回覧板を回し始める。（27丁目まで）</p> <p>12月のシンポジウムでさらにチームを増やす。（36丁目まで）</p>
<p>実施段階 3月</p>	<p>できあがった「星の回覧板」をボランティアで入力し、校正作業を実施。</p> <p>印刷所にて冊子化。</p> <p>3月の完成発表会にて500部完売。</p>
社会との繋がり	
<p>10月の子育てシンポジウム第一弾「覚和歌子さんによる公開授業」・・・読売新聞にて紹介、杉並区教育委員会ホームページで「星の回覧板」の紹介。</p> <p>12月の第二弾「谷川俊太郎さんと連詩をつくろう」・・・毎日小学生新聞にて紹介。</p> <p>3月の第三弾「星の回覧板」完成発表会・・・毎日新聞にて紹介（3月14日）、J-COMの取材（3月29日～4月4日放映予定）、毎日小学生新聞にて紹介（予定）</p> <p>杉並区ホームページ「動画コーナー」にて紹介</p>	

平成 20 年度 JAXA 宇宙連詩への取り組みの報告
松庵小地域子育てネットワークからの報告。

「星の回覧板」がつないだもの

松庵小地域子育てシンポジウム実行委員長 丹野由美

この取り組みは JAXA 宇宙連詩を知る一人の母親の声でスタートいたしました。
宇宙連詩に地域で取り組むことによって、色々な不安をかかえる子育て世代の親と、経験豊富な地域の大人とをつなげることができるのではないか、という声でした。

谷川俊太郎さんの第一詩、覚和歌子さんの第二詩からスタートし、第三詩からは、「星の回覧板」を回して詩を連ねていきました。「星の回覧板」は星の4年1組、星の4年2組、星の1～36丁目とひろがり、連なった詩は・・・1095詩にもなりました。一番詩の数が多かった回覧板は、松庵小のミニバスケットチームによる「星の19丁目」で、61詩にもなりました。

年齢は1歳から（こちらは、保育園の保母さんが代筆です）86歳にまでおよびました。松庵地域からスタートいたしましたが、中野区、渋谷区、武蔵野市、栃木、福島、福岡、岡山、鹿児島とひろがりを見せ、カナダ人の方による英文の詩もありました。詩を連ねた方の中には、東ちづるさんや、泉麻人さんもいらっしゃいました。

宇宙連詩で私たちは何を経験したのでしょうか？

まず宇宙という言葉がいかにか人々の心をかきたて、その視野をひろげるかということを知りました。

そして、宇宙は遠いところにあるのではなく、自分の目前に存在しているのだということも。詩を書くことで、自分自身の過去、そして未来を考え、そのことによって自分が大切に思っているものを知り、自分自身を再発見しました。

人の詩を読むことで、自分以外の誰かの人生に思いを馳せ、みんなが大切に思っているものは、世代を超えて変わらないのだなということを実感しました。

「星の回覧板」がつないだもの。

つまり私たちがつなげていったもの・・・それは、言葉、人、絆、そして希望です。

皆さん一人ひとりの中にある、希望をリレーしていったのです。

ゴールは宇宙です。

宇宙連詩というすばらしい取り組みに参加したことによって、この地域から「星の回覧板」

が生まれ、そして「星の回覧板」が、それぞれの心のなかにある未来への希望を、地球という小さな星の松庵という小さな地域から宇宙へとつないだのだといえるでしょう。

松庵発 宇宙連詩 星の回覧板 のシステム

松庵小地域子育てシンポジウム実行委員 源関淳子

テーマ

ひろがれつながれ！心のきずな いのちの輝き

目的

・子育て世代のさまざまな不安を抱える母親や保護者と、地域の方々とを結びつけ、つながりや広がりをつくり、より豊かな子育て、地域での心の通う交流のきっかけを作りたい。

方法

星の1丁目 2丁目とした「星の回覧板」のファイルを36冊（+学級2冊）用意して 第1詩 第2詩 を谷川さん 覚さんに書いていただき、それぞれを紡いでいく。

3行 5行 を繰り返す 宇宙連詩のルールにのっとる。

本来の宇宙連詩では、さばき手が集まった中から詩を選んで流れを導いていくが、「星の回覧板」ではより多くの方が、参加しつむいでいくことも今回の目的なので、さばき手は置かない。

「詩」を書いた背景をコメントとして書いてもらう。

<その1> 地域で回す「星の回覧板」

- 1 スタートと終わりの週を決める。 11月11日~2月24日
- 2 11月11日、宇宙連詩のレクチャ、と 12月13日、シンポジウムの参加者の中から回覧板の1週間毎の「管理者」を決め宇宙連詩の書き方のルール、回し方の説明をする。
- 3 管理者は 連絡先を回覧板に書いておく。
- 4 1週間、管理者の責任の下で自分の知人や知り合いに回覧板を回して宇宙連詩を紡いでいく。
- 5 1週間後、次の管理者が回覧板を受け取り（なるべく手渡し）知り合いの輪を広げていく。
- 6 最後の週に回覧板を回収する場所を決めておく。

特徴

- ・まったく知らない方同士の接点ができる。
- ・回覧板をコミュニケーションツールとしての地元での接点ができる。
- ・1週間の期間の中でもなかなか知人に回せない 書いてもらうのが頼めない人もいる。
- ・個人情報被人に知られるのが嫌な人もいる。

<その2> 同好会 部活等のグループ内でまわす「星の回覧板」

1 既存のグループの中で順に回していく。

2 手元にある間に自由にいろいろな方に書いてもらい次のメンバーへまわす。

特徴

- ・いつものメンバーなので回覧板を回しやすい。
- ・集団が大きければよりたくさんのメンバーにつないでいける。(最長 61 詩)
- ・新しいつながりはできにくい。
- ・いままで「詩」「文字や言葉」での接点はなかったので 新しい発見がある。
- ・なれ合い的な書き方になる。(同じようなタイプの詩になりやすい)

<その3> 犬の散歩仲間であつてまわす「星の回覧板」

お互いに細かい個人情報は知らないが 定期的に顔を合わせるメンバーであつてもらう。

特徴

- ・顔と犬は知ってはいるが個人的には知らない人同士があつてつながる。
- ・犬の名前をペンネームにしたりして「詩」を気軽に書くことができる。
- ・犬だけのつながりが 新しい接点があつた。

<その4 - 1> 「星の回覧板」をお寿司屋さん お蕎麦屋さん等の飲食店においてもらう。

特徴

- ・ただ置いてあるだけではなかなか書くところまでいかない。
- ・お店の方の協力が必要。
- ・お店の方からの「声かけ」が有効。ただし忙しい時間帯は難しい。
- ・口コミで広がればより効果的だが 今回は宣伝が難しく、期間が短かつた。
- ・常連の方には書いて頂きやすい。
- ・不特定多数のいろいろな方に参加の機会ができる。

<その4 - 2> 「星の回覧板」を 吉祥寺の本屋「おばあちゃんの玉手箱」に置いてもらう。

特徴

- ・同好の士が集まりやすく 詩に親しみを持っている方も多く書いてもらいやすい。
- ・個人同士のつながりではなく店を起点にした接点ができる。

<その4 - 3> 「星の回覧板を」水口産婦人科 へ置いてもらう。

特徴

- ・出産という大きなドラマを抱え 詩を書く貴重なきっかけがある。
- ・その時の感動を 星の回覧板に留めることができる。
- ・同じような状態にある方々なので似た詩が集まる。

<その5> 児童館、市役所、保健センター、卒業生保護者など職場や共通点をもつメンバーから広げていく。

特徴

- ・普段は一面でしか接していない人との 「言葉」を通じての接点ができる。
- ・思いがけない広がりへつながる。 著名人などとの接点もある。

.....

「星の回覧板」システム がもたらしたものの。

今まで縁がなかった人たちも今回の星の回覧板により、JAXA・宇宙・詩・地域・地域の小学校、といったものがより身近になるきっかけができた。

一人から広がりつながるひとの輪に「宇宙連詩」を利用し、「詩」「文字 言葉」を介して多くの人たちで共有することができるものにした。

星の回覧板に参加し世代を超えた参加者の方々と「宇宙連詩」を通してお互いが抱える思いの共感や新たな発見や希望 夢に触れ、さらには 宇宙にまで思いをはせることができた。

「エール」

松庵小地域子育てシンポジウム実行委員 花井 香

地域の子育てを保育園・幼稚園・学校等と連携してサポートする「主任児童委員」の活動をしている立場から、報告させていただきます。

松庵小地域子育てシンポジウムの取り組みは、地域と松庵小学校の二本柱で進みました。地域の子育ての拠点は学校ですが、地域の中で回覧板を回して詩を紡いでいくことと、授業をとおして子どもたちが連詩を作ることとはその過程も完成した形も違います。そのため、校長先生や担任の先生方と何度も意見交換をすることが不可欠でした。子どもによっては、クラスで仲間と切磋琢磨しながら言葉を選び詩を作ると同時に、さまざまな年代の方が参加している地域の回覧板に家族で詩を書く、という場合もあります。多分この二つは同じ谷川俊太郎さん覚和歌子さんの詩から発した連詩でも全く違うものだったのではないのでしょうか。だからこそ、宇宙のひとかけらとして偶然この地域でともに生きていることへの奇跡を感じてほしい、という最初の思いを最後まで先生方と共有できたことは、大変ありがたいことだったと感謝しております。二つのルートをたどった連詩が、できあがった冊子の中に、違和感なくおさまっているのはそのためだと思います。

松庵地域には2009年2月現在55人の0歳児が居住しています。この1年間に新たに55人の生命が生まれ、この地で子育てをしている家庭があるということです。それを聞いたとき、どこにそんな赤ちゃんがいるのだろうかと思いに思いました。公園デビューという言葉が言われてからさほどたっていないのに、今乳幼児をもつ母親にとっては、公園も決して安心して遊ばせる場所ではなくなってきています。閉じられた孤独な子育ての現状の象徴のようです。

三世代がともに生きられるのは人間だけ、という言葉聞いたことがあります。子どもが小学生になっても、中学生になっても「大丈夫、ひとりで考え込まないで、一緒に考えよう」と、言ってくれるだれか子育てには必要です。どこの地域にも言えることかもしれませんが、各世代が助け合う気持ちを持ちながら、それをお互いに伝えあうツールがなかなかありません。地域で取り組んだ「宇宙連詩」は、子育てはみんなですもの、そんな思いの結晶です。みんなで思いをつなげてみようという気持ちをもった方々が、私たちの周りにはこんなに沢山暮らしておられました！日々頑張っているお母さんに、1095詩を紡いだこの冊子は最高のエールになったのではないかと思います。

貴重な機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

平成 20 年度 JAXA 学校宇宙連詩への取り組みの報告 参加者からの報告

感想 1 (子育て世代大人)

この指とまれ！と声をかけたら、あっというまに人が集まりました。
何か楽しいことないかな～と皆思っているんだな。親のまなざし、子どもの目線、
こんなこと思っているのね・・・と色々な発見がありました。

感想 2 (子育て世代大人)

たくさんの方たちとの一体感はこの活動だからこそ味わうことができました。
知らない人、まったくの他人でもつながっているような気がしました。

感想 3 (地域大人)

連詩というものに初めて触れました。宇宙について(書くにあたって)多少なりとも調べたことは、良い経験になりました。

感想 4 (地域大人)

日ごろあまり意識しない宇宙を身近に感じることができました。地域のあたたかさを感じました。

感想 5 (子育て世代大人)

家族、人とのつながり、絆、温もり等、普段何気ない毎日の中の大切なことに改めて気付かせていただきました。言葉の大切さ、詩の奥深さ、何かを作り出し、表現することのプロセスなどを知ることができ、とても良かったです。

感想 6 (子育て世代大人)

色々な人の目線で見たり感じた世界を“詩”という短編集の形で楽しむことができたことと、地域の方々や子どもたちを身近に感じることができたことは、この活動でしか味わえないでしょう。

感想 7 (地域大人)

地域と子ども達との一体感を感じることができました。
こんな暗い?時代に“夢”と“希望”を与えていただけました。ゆっくりかみしめて「星の回覧板」を読ませていただきます。

感想 8 (子育て世代大人)

「星の回覧板」「宇宙連詩」ってなんだろう???なんだか壮大な企画のようだけれど・・・。
そんな感じで会場に足を運んだ私。参加してみると、ロマン溢れる JAXA 山中さんの宇宙の話、楽しくわかりやすい 覚さんのレクチャーがあり、実際にそこにいるみんながそれぞれ詩を書くことに。そこには「子育ての悩みなども・・・」の一行が・・・。
指名されて読み上げたお母さんの詩には、「おかあさん、おかあさんって呼ばないで(中略)でもその声がないと寂しい」といったような、家族から離れてみたい、でも家族がいることが幸せなんだ、という思いが伝わってくるものがいくつもありました。

自分の思いを吐き出すには恥じらいや躊躇といったものを伴います。私自身、仕事・

家事・育児に追われ、がんじがらめになっている状態が嫌で嫌でたまらない、といった事を詩に書き表わすのは、あまりにも生々しくて言うてはいけないことのような、そんな気分でした。全3回とも参加しましたが、第一回に突然指名されて読み上げられた詩には、正直で飾らない「お母さんの大変さ嬉しさ」や「子どもが面白いと思うおしっこのこと」などの詩がありました。みんなすごいなぁと感心するばかりでした。その後、グループ分けされて回された回覧板。正直言ってやっぱり自分の思いを吐き出すのは難しい。ちょっとステキに書き上げたいという雰囲気が出覧板にはありました。ゆったりとした時間がない自分には周りの人に宇宙連詩の説明をして書いていただくのも難しかった……。

でも、完成された冊子のナント素晴らしいことか！人と人がつながって素敵な仕上がりでした。書かれた詩の向こう側にある想いは、コメントに書かれ、読むと心に響いてきます。なんて人間はいいものなのでしょう！改めて人の温もりに包まれた時間でした。今を大切に生きなければ！

JAXA アンケートへのご協力をお願い

3月15日のアンケートを集約ください。アンケートの回収総数は、「(名中)」にご入力ください。

Q1 宇宙連詩に参加する「以前」に、「JAXA」や「きぼう」を知っていましたか？
たとえば、「私は、JAXAの です」とか、「私は、『きぼう』に関係した仕事を
しています」と言われたとき、ピンとききましたか？

「はい」と答えた方 22名(47名中)

Q2 宇宙連詩に参加して、JAXA や「きぼう」が、身近に感じられるようになりましたか？

「はい」と答えた方 43名(47名中)

Q3 来年も、みんなで宇宙連詩を作りたいですか？

「はい」と答えた方 43名(47名中)

Q4 その理由は何ですか？(箇条書きで結構です。)

- ・ つながりを感じて楽しかった。
- ・ 一般の人とのつながり、詩を考えることが面白かった。
- ・ 宇宙を身近に感じる事ができた。
- ・ 書けば書くほど楽しくなってきた。
- ・ 詩を書く楽しみ、人の作った詩を読む楽しみ、みんなで一つのことに取り組む楽しみを味わえた。